

嘉禄の念仏者追放について

中 井 真 孝

一 はじめに

筆者は別稿「専修念仏者禁制について」⁽¹⁾において、概略つぎのように論じた。専修念仏に対する糾弾の嚆矢たる「興福寺奏状」について、これまでの定説を覆し、停止要請がなされたのは専修念仏それ自体ではなく、専修念仏者の逸脱行為であったとする研究が登場した。専修念仏停止の院宣・宣旨は繰り返し出たので、歴史上類例のない宗教弾圧とみてきたが、改めて関係史料を読み直すと、これまで専修念仏停止とみなしていた歴史事象の多くは、必ずしも専修念仏そのものを停止したのではなく、問題を起こした専修念仏者への法的措置であった。これまで専修念仏停止を命令したと見てきた院宣・宣旨等は、元久二年（一二〇五）、同三年、建永二年（一二〇七）、建保五年（一二二七）、同七年、貞応三年（一二二四）と史料に現れる。これらを詳細に検討したところ、いずれも糾弾の対象となった専修念仏者への法的処断であり、考察した元久元年から貞応三年までの間、一度も専修念仏は停止されていなかった、という内容である。そこで課題は「嘉禄」の停止についてである。

平雅行氏は、従来の研究者が専修念仏弾圧の原因を論ずるに当たり、「しばしば「密通」・哀音亡国説・門弟の行状などに問題を矮小化してゆかざるを得なかったのは、選択本願念仏説の対象化が不十分で、諸行往生的な法然理解をしたため、貴族と同じ水準でしか事態を把握しえなかった」⁽²⁾からであると批判している。しかし、関連の史料

を検討するかぎり、専修念仏者への弾圧は彼らの「行状」よりほかに原因は存在せず、当時の貴族と同じ水準で事態を把握することは、宣旨を下す権限者の状況把握と問題意識を歴史的に理解することなのである。

専修念仏者への抑圧は、専修念仏への抑圧と解釈されても致し方ない側面もある。しかしながら、専修念仏者の逸脱行為を禁止することは、専修念仏停止と同義ではない。これはある種の錯覚であろうが、正しい歴史理解ではないのである。

二 法然廟の破壊

それでは関連の史料を検討しよう。いわゆる「嘉禄の法難」^③は、『法然上人行状絵図』（以下『行状絵図』という）巻四二第一段に、

爰上野国より登山し侍ける並榎の堅者定照、ふかく上人念仏の弘通をそねみ申て、弾選択といふ破文をつくりて、隆寛律師の庵におくるに、律師又顕選択といふ書をしるしてこれをこたふ。その詞には、汝が僻破のあたらざる事、たとへば暗天の飛礫のごとしとぞあざむかれて侍る。定照いよ／＼いきどをりて、ことを山門にふれ衆徒の蜂起をすゝめ、貫首^{浄土寺僧 正円基}にうたへ奏聞をへて、隆寛・幸西等を流形せしめ、あまさへ上人の墳墓を破却して、死骸を鴨河にながすべきよし結構す。

と、その発端が定照と隆寛の著述の応酬にあったと記す。続いて『行状絵図』は次のように事の顛末を記す。

嘉禄三年（一二二七）六月二十二日、山門より所司・専当を遣わし、法然の廟堂を破却せんとしたが、六波羅探題の北条時氏が頼宮の内藤五郎兵衛尉盛政（法師西仏）を outward させて、幕府の許可なく行なう暴挙を制止した。廟堂は事なきを得たので、その日の夜、法蓮房（信空）や覚阿弥陀仏らが妙香院の僧正良快（九条兼実の息）に相談して、法然の遺骸を掘り起し、ひそかに京都の西郊に移すことにした。このとき、宇津宮頼綱（連生）、塩屋朝業

(信生)、千葉胤頼(法阿)、渋谷七郎(道遍)、頼宮盛政(西仏)らが警固した。山門も僧徒らが上人の遺骸を鴨川に流すという望みを果たせなかったことに腹を立て、遺骸の行方を捜しているとの噂が聞こえてきたので、同月二十八日の夜、広隆寺の来迎房(円空)のところに移した。翌年の安貞二年(一二二八)正月二十五日、遺骸を西山の粟生野の幸阿弥陀仏のもとに移して、火葬に付したという。

火葬の後、『法然上人伝法絵』(高田本)には「オノノ御骨ヲエ、クヒニカケテ、如来ノ舍利ヲウヤマウカコト

シ。コ、ニシリヌ、コレ聖人ノ方便ナリ、マタク邪魔外道ノ障礙ニアラサル也」と記して、「嘉祿の法難」の記事を終えるが、『行状絵図』には『伝法絵流通』(善導寺本)や『法然上人伝絵詞』(琳阿本)をうけて、貞永二年(一二三三)に正信房(湛空)が幸阿弥陀仏に預け置いた御骨を得て、二尊院の塔に収めたという後日譚を載せる。

法然伝は廟堂から遺骸を持ち出して、粟生野で荼毘に付したと記すが、日蓮の『念仏無間地獄鈔』には、

人王八十三代土御門院御宇承元元年二月上旬、専修念仏之張本安樂住蓮等捕縛、忽被刎頭畢。法然房源空沈遠流之重科畢。其時摂政左大臣家実と申は近衛殿の御事也。此事皇代記に見たり。誰疑之。加之、法然房死去後又重自山門訴申に依て、人王八十五代後堀河院御宇嘉祿三年、京都六箇所の本所より法然房が選択集並印版を賣出して、大講堂の庭に取上て、三千大衆会合し、奉報三世仏恩也とて、令焼失之、法然房が墓所をば、仰付犬神人掘出之、被流鴨河畢。宣旨・院宣・関白殿下御教書、五畿七道被成下、六十六箇国念仏行者、一日片時不可置之、可追遣対馬島之旨、諸国司被仰付畢。此等次第、両六波羅注進状、関東相撲守請文等、明鏡者也。と、山門側が専修念仏に加えた弾圧は、法然伝の記すところよりも遙かに規模が大きかったようである。法然の遺骸を「被流鴨河畢」と記すところは法然伝と齟齬し、「選択集並印版」を取り上げて「令焼失之」とあるのは法然伝に見えない。この『念仏無間地獄鈔』は、『弾選択』の著者を「山門探題」の仏頂房隆真法橋とするなど誤解も

存し、すべてを事実だと考えるわけにはいかない。しかし、「宣旨・院宣・関白殿下御教書」などは、日蓮が別の著書⁽⁴⁾にも引用しており、「嘉禄の法難」の全貌をうかがうに重要な史料である。

大谷の法然墓堂の破壊について、『民経記』（嘉禄三年六月二十一日条裏書）に、

伝聞、山僧下、伐念仏先師法然房墓堂云々。

『明月記』（同月二十七日条⁽⁵⁾）に、

山門僧又依妨専修、発法然房之墓、破壊其墓堂。以濫僧等令壞取之間、自武家制止^{不知此、}事日、欲陵礫山所司等之間、訴訟又噉々云々。近日謀反惡徒蜂起之最中、時節負同心之疑歟、甚無機間。

『百練抄』（同月廿四日条）に、

山門所司已下群集大谷辺、破却法然上人墓所。是専修念仏事、近日有山門之訴、於彼墳墓興盛之故云々。但於遺骨者、門弟等偷掘出、渡他所云々。

と記録されている。これらの史料は、日付に食い違いが見られるものの、『行状絵図』と概略同じことを伝えており、かえって『行状絵図』の記事の正しさを傍証するものと言えよう。しかし、『行状絵図』などの法然伝は、法然の遺骸を搬出した後、翌年正月に茶毘に付すまで何事も起こらなかったかのように記すが、実際は専修念仏者に対する迫害が行われていた。以下、月日を追って検討しよう。⁽⁶⁾

三 隆寛・空阿・幸西の流罪

日蓮宗が伝える「念仏者所追事」⁽⁷⁾に従えば、事件の推移は次の通りであった。

元仁二年正月、依有人勸略製此書、同年夏件人以此書披露京中。隆寛作救号顕選択。嘉禄三年後三月、岡本迎蓮以顕選択披露東国。無智道俗皆依此書謂彈者誤。仍為決是非、以彈顕選択等、同四月付便送進之處、三院碩

徳一山之衆徒、即披閱之、大以動搖。且為止謗法之罪、且為止邪見之教、六月十七日内、三度三塔会合経奏聞畢。

ここにいう「此書」とは『彈選択』を指し、定照は元仁二年（一二二五）正月に或る人の勧めで書き、同年夏にこの或る人が京中に披露したところ、隆寛が反駁して『顯選択』を著わした。嘉禄三年閏三月に隆寛の弟子の迎蓮が『顯選択』を東国に広め、無智の道俗がみな『彈選択』の誤りを言い立てたので、翌月になって定照は是非を決すべく『彈選択』と『顯選択』の両書を山門に送付した。東塔・西塔・横川の碩学や一山の衆徒が披閱し、大いに動揺した。「謗法之罪」と「邪見之教」を止めるため、六月十七日、三度にわたり三塔会合して、奏聞に及んだという。そして「永尊堅者状」に、

彈選択等被上送之後、披露于山上。於彈選択者每人玩翫之、顯選択者諸人謗之。法然上人之墓所、仰付感神院犬神人令破却畢。其後及奏聞蒙裁許畢。

と言う。法然の墓堂破却は朝廷の「裁許」を待たず、感神院（祇園社）の犬神人に命じて強行されたことがわかる。その「裁許」とは（年欠）六月二十九日後堀河天皇宣旨のことであろう。

専修念仏事、停廃宣下重疊之上、倭尚興行之条、更非公家之所知食。偏為有司之怠慢。早任先符可被禁遏。其上於衆徒之蜂起者、宜令加制止給者、依天氣言上如件。信盛頓首恐惶謹言。

六月二十九日 左衛門權佐信盛奉

進上 天台座主大僧正御房政所

追言上

不知実名兵衛入道事、不日可被尋仰閑束之由、其沙汰候也。重頓首謹言。

専修念仏事、勅答之趣、綸旨如此、不日可令^{（披か）}露山上給者、和尚御房御氣色如此。仍執達如件。

嘉禄の念仏者追放について

六月二十九日 権大僧都

執当法印御房

宣旨の冒頭に「専修念仏事、停廢宣下重疊之上」とあり、また「早任先符可被禁遏」という「先符」の存在を予測せしめる言い方は、元久元年から貞応三年までの間、一度も専修念仏は停止されていなかったとする別稿と矛盾することになるが、この点に関しては後ほど改めて考察したい。この宣旨の趣旨は、専修念仏の興行は公家の知る所ではなく、有司の怠慢のためであると弁解しつつ、衆徒の蜂起を制止せよと座主円基に宣下した。そして円基は御教書を発して、宣旨の趣旨を衆徒に伝達したのである。

なお、宣旨の追伸に「不知実名兵衛入道」とある人物は、『伝法絵流通』以来の法然絵伝に見え、法然墓堂破壊の制止に向かった頓宮の内藤五郎兵衛尉盛政（法師西仏）のことで、手荒な態度であつたらしく、前引の『明月記』に「自武家制止（事曰、不知此、欲陵礫山所司等之間、訴訟又嗷々云々）とあるように、山門から「所司」が陵礫されたと訴訟に出たのである。

ここで注目すべきは、感神院に宛てた嘉禄三年六月三十日延暦寺政所下文である。

延暦寺政所下 感神院

可早捕擲（捕擲）一向専修張本隆寛・成覚・空阿其以下余党等事

右専修、仏法之魔障、諸宗之怨敵。因茲度々經奏聞之處、皆蒙許勅裁畢。（勅許か）仍衆徒其後達天聽之刻、又以被宣下。凡専修興行者、以源空為先達。門弟等剩点彼墓所、称御廟成帰敬。奇恠之至、禁而有余之間、（衍め）彼破却墳墓燒捨其骸畢。根本已被絶、枝葉何不枯哉。於今者不論貴賤之栖、不撰権門之領、（責出）悉於彼輩可擲捕也。就中今度又任先符可被禁遏之由、宣下状為明鏡。則者山門末寺庄園、日吉神人寄人、惣者諸国七道之土民、（以下）迈寺迈山之僧徒、搜尋彼専修結構之輩、擲取其身、破却住所、可追放皇土外之状、依大衆僉議所仰如件。

嘉禄三年六月三十日

小寺主法印住僧^(増)

(別当三綱等連署省略)

翌三十日に、延暦寺政所は「大衆僉議」をもって決し、「一向専修張本」たる「隆寛・成覚・空阿」および「其余党」を搦め捕ることを感神院に命じた。前日の後堀河天皇宣旨は、座主円基に衆徒の蜂起を制止させるために、取り敢えず「早任先符可被禁遏」との文言を入れたに過ぎなかったが、奇貨おくべしとばかりに、「今度又任先符可被禁遏之由、宣下状為明鏡」と、専修念仏禁遏の宣下は明鏡だと強弁している。それは法然墓堂の破却を合法化するに十分な理由となるからであつた。法然墓堂の破却について、「凡専修興行者、以源空為先達。門弟等剩点彼墓所、称御廟成帰敬。奇恠之至、禁而有余之間、彼破却墳墓焼捨其骸畢。根本已被絶、枝葉何不枯哉」と言う。源空（法然）の弟子らが彼の墓堂を「廟堂」と称して帰敬をなすのは「奇恠之至」であると批難する。

御廟とは貴人の墳墓を指すので不埒だから、「禁而有余」というのは当然であるとしても、暴力的に破壊し遺骸を焼き捨てるのは行き過ぎであろう。しかし、その「廟堂」に貴賤男女が参詣して、「真影」を礼する者が群をなす様相^①を目の当たりした延暦寺の衆徒は、専修念仏の「興盛」と捉え、「先達」である法然の墓を破却すること、門弟等の活動拠点^②を叩き潰そうと意図したのである。「根本已被絶、枝葉何不枯哉」というのは、「根本」（法然墓堂）がすでに絶えたので、「枝葉」（専修興行）は枯れるであろうと、それを確信した行為であつたことを示唆している。

この三十日の時点で、隆寛・幸西（成覚房）・空阿弥陀仏の三名の流罪を奏聞したのであろう。「永尊堅者状」によると、前引の文に続いて、

七月上旬法勝寺御八講之次、自山門触南都、清水寺祇園辺、為南都山門之末寺之处、専修之輩容身之草菴、悉令破却畢。仰使庁被搦取之間、礼讃之声黒衣之色、京洛之中都以止畢。張本三人、雖被定流国、逐電之間、未

向配所、山門于今訴申候也。

とある。この書状は、永尊が定照に宛てた嘉祿三年十月十五日書状であるが、「七月上旬」は「悉令破却畢」まで係るものと思われる。法勝寺の御八講は七月三日から六日まで行われており、この機会を利用して興福寺に働きかけ、清水寺・祇園近辺の興福寺末寺に住居を構える専修僧の草庵をことごとく破却せしめている。先の政所下文に言う「不論貴賤之栖、不撰權門之領、悉於彼輩可搦捕也」が実施されたのである。『明月記』（嘉祿三年七月四日条）にも、

近日山門小法師原、於路頭見及所破却念仏者之黒衣剪笠云々。又好其宗立飼法師原尊卑之家、触送可追却之由云々。東一条院無此謗云々。道方卿家成群好色等、近日逃去云々。

とあり、山門の小法師どもが路頭において、念仏者を見つけ次第、その黒衣を破って笠を切り取り、さらに念仏宗を好み法師達を立ち飼う尊卑の家に、「可追却之由」を触れ送っていたことがわかる。興福寺や貴賤の家への山門の「触」は七月三日には出たものと思われる。事の重大さに驚き、翌日に急遽、天台座主円基に充てて出された（年欠）七月四日後堀河天皇綸旨に、専修念仏者の住居破却の停止を要請しているからである。

専修念仏事、任奏聞之趣、欲有計御沙汰之處、衆徒等下遣所司於末寺内、擬破却彼等住坊之由、有其聞。事若実者、定喧嘩事出来歟。還不可有沙汰之詮哉。早可被停止此令候。被糾彈其身之上、何可貽鬱訴哉。沙汰之趣、殆似招狼藉。殊可被加制止候者、綸言如此。仍言上如件。頼隆誠恐頓首謹言。

七月四日辰廻 右中弁頼隆奉

進上 天台座主大僧正御房政所

続いて五日にも（年欠）七月五日後堀河天皇綸旨¹⁵が出ている。

被綸言旨、専修念仏之行者、諸宗衰微之基也。因茲代々之間、頻被降嚴旨、殊所加禁遏也。而頃年又称有興行、

山門令訴申之間、任先符可令停止之由、被仰下先□、其上且為禦仏法之凌夷、且依優衆徒之鬱訴、以謂根本隆寛・成覚・空阿弥陀仏等、可令処其身於遠流之由、不日所被宣下也。於余党者、尋搜其在所、永可被追却帝土也。此上早慰愁訴、可停蜂起之旨、不廻時刻、可有御下知候者、綸旨如此、悉之。頼隆誠恐謹言。

七月五日酉刻

右中弁頼隆奉

進上 天台座主大僧正御房政所

この綸旨において再び専修念仏停止の「先符」の存在を言うが、新たに張本たる隆寛・成覚・空阿弥陀仏らを遠流に処すことを約束するので、衆徒の蜂起を止めさせるように、座主円基に命じた。円基は戌刻、三塔に綸旨を披露すべく御教書を発している¹⁶。三人の流罪は実際のところ六日の陣の定めで決し、結政所でその事務処理が行われた。『明月記』（嘉禄三年七月六日条）に、

山門之訴強盛、可振神興之由、頻以騷動之間、今日雅親卿參陣、左大弁參結政。張本隆寛^{本山僧律師}、空阿弥陀仏、成覚等流罪云々。（中略）善恵房上人^{宇津宮隨逐之師也}、山門訴訟、入其数之由聞之。周章書誓状且進公家、妙香院又被陳給云々。吉水前大僧正帰依、為臨終善知識。以之為証拠云々。

とあり、『民経記』（同月六日条頭書）に、

伝聞、念仏三人□□、陸奥隆寛、薩摩^{幸西}上人、^{空阿弥}云々。不便□歟。

とあることで知られる。また『皇帝紀抄』（嘉禄三年＝安貞元年条）にも「七月六日、有流人宣下事。立念仏別宗、以諸宗称難行之輩、依山門訴申、張本三人被処遠流」と記す。この日、官宣旨¹⁷が下り、隆寛らの度縁を没収している。

右弁官下 延暦寺

応早取進僧隆寛・幸西・空阿弥陀仏土縁事^{（度）}

右權大納言源朝臣雅親宣、奉勅、件隆寛等坐事配流。宜仰彼寺、可令取進度縁者、宜承知依宣行之。不可遺失。

嘉禄三年七月六日

左大史小槻宿禰在判

左少弁藤原朝臣在判

『百練抄』(安貞元年条)に、

七月七日、専修念仏者配流官符請印。隆寛律師還俗名山遠里配陸奥後日被改他所云々、空阿弥陀仏改名原秋沢、薩摩、成覚改名枝重、壱岐島。

とあり、七日には配流官符の請印が行われている。

四 専修念仏興行の停廃

前節に掲げた記事は、張本三人の流罪が確定し、太政官符の作成までがなされたことを示すが、山門衆徒の動きは次の段階に移った。『明月記』(嘉禄三年七月十一日条)によれば、

山門訴相触諸宗、悉令追払念仏法師原云々。入夜静俊註記来。招寄問衆徒事。沙汰甚興盛。専修停止之沙汰、日々雖議定、其事未有一定云々。当時谷々悉行如法経懺法最中、其隙成此議定之間、惣念事未定云々。

と、念仏法師の悉皆追払いを諸宗に触れ、「専修停止」を求めて訴訟を起こしている。朝廷では陣の座において日々議定が行われていたが、なかなか結論は出なかったようである。そしてついに議定が一つの結論をみたのか、(年欠)七月十三日後堀河天皇綸旨と嘉禄三年七月十七日後堀河天皇宣旨19が出た。

専修念仏興行之輩可停止之由、被宣下五畿七道畢。且可有御存知候者。綸言如此。悉之。頼隆誠恐頓首謹言上。

七月十三日 右中弁頼隆奉

進上 天台座主大僧正御房政所

嘉禄三年七月十七日宣旨

念仏行業者衆僧所修也。而頃年以來、内不守三宝之戒行、外不顧數般之制符、建專修之一字^{字賊}、破自余之諸教。或卜京洛率無懺之徒、或交山林招不法之侶。以之為耽女色之縁、以之為黷仏道之基。濫吹之甚職而斯由。是以於隆寛・幸西・空阿弥陀仏者、早温本源処以遠流。此外猥称彼等之遺弟、為企自專之奸惡、猶留処所更犯禁法。凡僧尼懺座妄愛哀音^{（発か）}、非但厭俗中之耳、抑亦乖真際之趣、如不改正、何肅法門。弘仁聖代格条在眼。宜課五畿七道、停廢興行之道、捉搦違犯之身者。

藏人頭右中弁藤原頼隆奉

この綸旨・宣旨は「專修念仏停止」の綸旨・宣旨と解されがちだが、どうであろうか。綸旨の文面をよく読むと「專修念仏興行の輩を停止すべきの由を五畿七道に宣下せられ畢んぬ」とあつて、特に「輩」の字があることに注意したい。專修念仏を興行する輩を「停止」するとは、その張本たる隆寛らを京都より「追却」するという意味にしか考えられないのである。また宣旨はそれを載せる二十五日条の本文に「抑頭弁念仏制止口宣、以外下品書之由世間有沙汰。又山門衆徒等見之含咲云々」と記主の感想を添えている。頭弁の作成した口宣が思ひのほか下等だと人の噂になり、山門の衆徒に笑われたのは、「念仏制止」と言うにはまるで「的外れ」の内容だったからではないか。「念仏行業者衆僧所修也」から「濫吹之甚職而斯由」までは抽象的な総論で具体性に欠け、「凡僧尼懺座妄愛哀音」から「何肅法門」までは、別稿でも指摘したように、『類聚三代格』所収の延暦二年十一月六日太政官符の文言を抜粋して引用している。「弘仁聖代格条在眼」とは、哀音の禁令が弘仁格に見いだされるという意味であろう。そうなると、宣旨のうち残る部分の「是以於隆寛・幸西・空阿弥陀仏者、早温本源処以遠流。此外猥称彼等之遺弟、為企自專之奸惡、猶留処所更犯禁法」と「宜課五畿七道、停廢興行之道、捉搦違犯之身者」が宣旨の肝心な内

容ということになる。しかも隆寛ら三人の流罪はすでに決定済みであった。『念仏者追放宣状事』に収める年月不詳の太政官符は、嘉禄三年七月十七日後堀河天皇宣旨に基づいて作成されたと思われる太政官符である。

太政官符 五畿内諸国司

応宣停廃専修念仏興行、早捉搦隆寛・幸西・空阿弥陀仏等遺弟留処所、犯禁法輩之事

弘仁聖代格条在眼、左大臣宣、奉勅、宣課五畿七道、停廃興行之道、捉搦違犯之身者、諸国司承知、依宣行之。符到奉行。

修理右宮城使正四位下行右中弁藤原朝臣 修理東大寺大仏長官正五位下左大史兼備前権介小槻宿禰

右の太政官符は事実書（本文）に脱落があるらしく、また日付を欠く点で疑問が存するものの、事書に「停廃専修念仏興行」とあるから、専修念仏停廃を命じた法令と言わざるを得ない。しかしながら、その「停廃」の対象は「専修念仏の興行」である。この「興行」は「仏法興行」の用例と同じく「盛んに行なう」の意味である。六月二十九日後堀河天皇宣旨に「専修念仏事、停廃宣下重疊之上、偷尚興行之条」、七月五日同天皇宣旨に「而頃年又稱有興行、山門令訴申之間」とあった。停廃させる「興行」には明らかに「尋常の度を過ぎて」というニュアンスが込められているのである。したがってこの宣旨ないし太政官符をもって「念仏制止」と呼べるか躊躇するところである。結局のところ、七月十七日の宣旨および太政官符は隆寛ら三名の弟子たちの捉搦を命じた法令であった。

ところで、そもそも六月二十九日の宣旨に「停廃宣下重疊」あるいは「早任先符可被禁遏」と言うが、それが一体どの法令（宣旨・太政官符）を指すのか分からない。別稿で取り上げた「去建永二季春、以厳制五箇条裁許、官符施行先畢」とある建永二年（二二〇七）の「厳制五箇条」や「養老制誠・延喜符句」の詞が見える貞応三年（二二四）の専修念仏者禁制宣下が想定されよう。「厳制五箇条」を記した官符の内容は不明であり、養老四年（七二〇）の詔は転経唱礼における別音、延暦二年（七八三）の官符は悔過の座での哀音を禁じた法令であった。いずれ

も明らかに専修念仏停止の法的根拠にはなりえず、山門大衆の蜂起を制止したいがための糊塗に過ぎなかったのである。

以上に見た山門側の動きの中で、坪井剛氏が指摘した注目点を紹介しておきたい。それは第一に専修念仏者に対する制裁が山門の末寺・領内に限られていることである。七月四日後堀川天皇綸旨に「衆徒等下遣所司於末寺内、擬破却彼等住坊之由、有其聞」とあり、所司を遣わしての住坊破却は延暦寺の末寺内で行なわれた。ところが前述したように、「清水寺祇園辺」の興福寺末寺内の草庵破却には南都に「触」を出し、尊卑の家にかくまわれている者の追却には、やはり「触」を送り、直接の手出しは出来なかったと考えられる。第二に坪井氏は、朝廷は専修念仏禁止を積極的に進めたわけではなく、「宣旨・院宣（綸旨か―筆者注）において最も強調されているのは衆徒蜂起の制止であり、朝廷側がこの事件に対する主眼はこの点にあった」という。本稿の趣旨に照らして首肯すべき指摘である。

五 念仏者余党の追却

さて事件は、隆寛ら三名の弟子たちの捉搦へと展開するが、隆寛ら三名の動静について『明月記』に、人云、山門衆徒之怒弥嗽々、吐惡言云々。張本三人流入各隠于引汲之所、不知其在所。朝威輕忽、人心狂亂、以之可察歟。（嘉禄三年七月廿八日条）

又去朔日社頭大殿開夜、衆徒三百人許叫喚、宣陽門院立飼念仏法師十二人、十人宛壯年女房十人局給、二人又御物寵愛事甚奇恠。以濫僧之輩、可奉責、無許容歟。可振七社御輿之由、放高声。参詣雜人悉側耳云々。（同年八月三日条）

定修下山来。依腹痛発欲服蒜。衆徒連々嗽々誹謗貴人云々。（同月十一日条）

午時許定修來。專修念仏所行奇恠、愚意所存、破彼宗之文作之、成草由示。少年淺臆如此事、付善付惡發言極無由、不可然雖示含、取出三帖草子可一見由詭之。内典於事不堪、雖不可分別是非、置之退帰。(同年九月三日条)

と見え、隆寛ら三人は縁故を求めて隠れてしまい、所在が知れなくなつたという。すなわち逐電したのである。八月に入つても山門側の怒りは収まらず、衆徒三百人が日吉社の社頭で、宣陽門院が念仏法師をかくまい淫らな行爲に及んでゐると騒ぎ立て、日吉七社の御輿を担ぎ出すべきだと大声で叫んでいた。病気で下山した定修(定家の息子)が衆徒の貴人への誹謗が止まないと語つてゐるのは、隆寛ら三人および彼らの弟子の「念仏法師」が宣陽門院などの「貴人」の家にかくまわれていたからである。なお、その定修は、專修念仏宗を非難する書物を著わして父の定家に見せてゐる。しかし、定家は年若く臆浅いものが書くべきでないと論し、定家自身は仏教の是非を分別できないと考えていた。

ついに八月二十七日、山門からの注文に基づき、逮捕すべき「念仏者余党」四十六人の交名を記した検非違使別当宣が出た。『民經記』(嘉禄三年八月卅日条)に

此間風聞、念仏者余党可擲出來名也。於此夾名者、天下女房恥辱歟。不可説々々々。未曾有々々々。

余党可擲出事

(僧名省略)

廻文案文

(人名省略)

右念仏者余党事、山門注文如此。早任夾名殊可令尋沙汰者、依別当宣所廻如件

嘉禄三年八月廿七日

とある。交名には住所や俗縁などの注記が書き込まれており、「敬仏<sup>宜秋門院女房
東御方内アリ</sup>」「聖縁同内ニアリ」「観明<sup>二郎入道、宣
陽門院権中納</sup>

言殿ノ内
ニアリ」

のごときは、女院の家にかくまわれていたことを示し、『明月記』の記事を傍証しているよう。『民経記』

の記主・藤原経光を「於此來名者、天下女房恥辱歟」と嘆かしめる事態が起きていたのである。なかには「知願ハ

出使了了」

出使了了、
法印辺三町許
法性寺教殿

「薩生」とあつて、検非違使庁に出頭したものもあり、また「敬日<sup>長樂寺、但馬堅者同、
海也、付隆寛城外了</sup>」

「念照<sup>長樂寺、敬日弟子、
付隆寛城外了</sup>」

のように、隆寛と一緒に城外に去つたものもいた。したがつて交名の僧すべてが検非違使

によつて逮捕されたかは分からないが、ともあれこの検非違使別当宣によつて、念仏法師が京都からいなくなり、「永尊堅者状」にいう「仰使庁被擲取之間、礼讃之声黒衣之色、京洛之中都以止畢」の状況に陥り、「張本三人、雖被定流国、逐電之間、未向配所、山門于今訴申候也」の事態となつたのである。

隆寛について、嘉禄三年九月二十六日関白家御教書が六波羅探題北条時氏に宛てて出された。

隆寛律師依為専修張本、山門訴申之間、被配流陸奥国畢。而衆徒尚有申旨。仍改配所、可追遣対馬島也。当時
經廻東国辺云々。不日可追遣彼島之由、可被申関東候者、依殿下御気色、執達如件。

嘉禄三年九月二十六日

参議在判

修理権亮殿

隆寛が京都から逐電してしまい、東国の辺りを經廻しているとの報に接した山門側は、流国を対馬島に改めるよう朝廷に訴えた。十月十五日、六波羅探題に宛てた関東御教書²⁷には、「隆寛律師事、右大弁宰相御奉書披露候畢。件律師去七月比令下向、雖經廻鎌倉近辺、任京都制符、被追放念仏者之間、令流浪奥州方畢云云。早尋搜在所、任被仰下之旨、可追遣対馬島也」とあつて、鎌倉近辺を去り奥州へ流浪との情報を得たので、在所を尋ね搜し対馬島への追遣を命じたことを言上するよう指示している。ところが、実のところ隆寛は奥州へは弟子実成房を代わりに送り、自身は森季光（入道西阿）の庇護を受けて相模国飯山に匿われ、この年の暮、すなわち安貞元年（一二二七）

十二月十三日に没した。⁽²⁸⁾

関東御教書の文中にいう「右大弁宰相御奉書」とは、九月二十六日関白家御教書を指すが、ついで十月二十日に関白家御教書が直接、執権北条泰時に宛てて出された。

専修念仏事、仰京畿七道永可被停止之由、先日被宣下候畢。而諸国尚有其聞云々。守宣旨状可致沙汰之由、可被仰付地頭守護所等之由、山門訴申候。可有御下知候。以此旨可令申沙汰給之由、殿下御気色所候也。仍執達如件。

嘉禄三季十月二十日

参議在判

武蔵守殿

御教書文中の「守宣旨状可致沙汰之由、可被仰付地頭守護所等之由、山門訴申候」とある山門の訴えは、具体的には『浄土宗見聞』下に引く次の記事中の「奏聞」および「陣参」に相当する。

此十一日僉議云、法然房所造選択謗法書也。天下不可止置之。仍在在所所持、并其印板大講堂取上、為報三世仏恩、可焼失之由、奏聞仕候。（「永尊豎者状」）

去月十五日聖覚・貞雲・宗源・朝晴・延真陳参、以聖覚為云口文聖、永可被停廢念仏宗之由言上之。（「永尊状」）
専修事、其沙汰興盛、於京都者大旨、被追却其邪徒候畢。其間事論旨等進之、去月十五日聖覚法印已下門徒僧綱、細細令陳参候了。一一勅答候歟。十一月二日。（「宗源大僧都状」）

右の「永尊豎者状」は『念仏者追放宣状』によれば嘉禄三年十月十五日の日付の書状であり、「此十一日」は十月十一日を指し、「永尊状」の「去月十五日」は「宗源大僧都状」と照合すれば、十月十五日を指すことは明らかに、すなわち十月十一日に大衆僉議が行われ、十五日に聖覚ら五人が朝廷の陣座に推参したのである。

聖覚らの陣参は、『皇帝紀抄』（嘉禄三年＝安貞元年冬）の「十月十五日、山門僧綱以下三綱所司、日吉社司等群

参、訴申専修念仏宗停廃事」という記事からも傍証されるが、選択集の焼却に併せて専修念仏宗停廃のこともを奏請したと考えられる。小此木輝之氏は、「法然没後、徐々に醸成されたところの山門衆徒と専修念仏宗の一触即発の状況がなければ、突然、墓を暴くような行動は考えられない。『選択集』論争がなかったとは断じないが、それは一部の浅牒の徒が問題にしたもので、そこに事件の全てがあつたとは言にくい」と評されるが、山門側から選択集が「謗法」の書として捉えられていた事実は無視できない。

この選択集焼却に法然の弟子と目されている聖覚が関わり、しかも陣参のとき「云口」(発問者)となつて専修念仏停廃を要求していたことは、従来の聖覚像に再考を迫るものである。⁽³⁾陣参によつて要求された選択集焼却の件は、『浄土宗見聞』下に引く十二月十五日の「俊範大僧都状」に、「抑選択集印板、自公家被召送山門畢。自今已後、於弘通之輩、違勅之科不通皇宣、^(憲か)謗法之罪脱仏制哉」と言い、朝廷の許可を得たようである。

専修念仏宗停廃の件は、「永尊状」と「俊範大僧都状」の間に、「殿下御返事云、実尤可停廃云々」と記すように、十月二十日に関白家御教書(前掲)が出ている。御教書の要旨は、「専修念仏の事は先日、停止を京畿七道に宣下したが、諸国ではなお行われており、地頭・守護らに仰せ付けてほしいと山門から訴えているので、その旨を告知されたい」と幕府に依頼したものである。ここに「先日」とは言うが、近くに相当する宣旨・綸旨の類が見当たらず、恐らく(年欠)七月十三日後堀河天皇綸旨か嘉禄三年七月十七日後堀河天皇宣旨、もしくはこの綸旨・宣旨と密接に関連する年月不詳太政官符を指示するのであろう。これらの綸旨・宣旨・太政官符はすでに述べた如く、専修念仏を興行する隆寛ら三名の弟子たちの捉搦を命じたものであつた。

六 おわりに

嘉禄三年六月から十月までに出た専修念仏に関する綸旨・宣旨・関白家御教書・関東御教書などを子細に検討し

たところ、これらに「停止」ないし「停廃」の文言は存するが、いわゆる「専修念仏停止」を命じた法令ではなく、「専修念仏を興行する輩を停止すべし」「(念仏)興行の道を停廃し、違犯の身を捉搦すべし」を内容とした法令であったという結論に到達せざるを得ない。「専修念仏停止」に最も近い文言を備えるのは、「専修念仏事、仰京畿七道永可被停止之由、先日被宣下候畢」という嘉禄三年十月二十日関白家御教書であるが、これとて典拠となる法令は「専修念仏興行之輩可停止」をいう(年欠)七月十三日後堀河天皇綸旨か、「停廃興行之道、捉搦違犯之身」をいう嘉禄三年七月十七日後堀河天皇宣旨であった。

逐電した隆寛の在所を尋搜して対馬島への追遣を命じた嘉禄三年十月十五日関東御教書に「件律師去七月比令下向、雖經廻鎌倉近辺、任京都制符、被追放念仏者之間、令流浪奥州方畢云云」とある。この「京都制符」とは山門側の「専修停止」ないし「専修念仏宗停廃」の要求に応じて出された法令を指すが、その実態は「念仏者追放」の法令であった。こういった観点では是非とも検討しておきたいのは、『念仏者追放宣状事』に収める天福二年(一二三四)六月晦日四条天皇宣旨である。

頃季以来、無慙之徒不法之侶、不守如如之戒行、不恐処処之嚴制、恣建念仏之別宗、猥謗衆僧之勤学。加之内擬妄執乖仏意、外引哀音蕩人心。遠近併帰専修之一行、縑素殆徧頭密而教。仏法之衰滅、而由斯。(職脱か)自由之姦惡、誠禁而有余。是以於教雅法師者、温本源遠流。此外同行与党等、慥停廃其行於帝土之中、悉追卻其身於洛陽之外。但或為自行、或為化他、於至心専念如法修行之輩者、不在制限。

天福二年六月晦日

藤原中納言權弁奉

この宣旨は専修念仏者に対する糾弾の言葉に満ちているが、教雅の罪状は明らかでない。関連する史料を掲げよう。

花山院侍従入道故中納言家経
息、俗名教雅、称念仏上人、舊傾城之類被行過法。仍令却離件法師処遠流、余党等可追却洛外之

(集)

由、被下宣旨。（『百練抄』天福二年七月二日条）

（身）
弥阿弥陀仏入道教雅聞流罪由、忽隱居云々。蔑王事歟。是又傾城等之所為歟。（『明月記』天福二年七月十日条）

花山院左大臣兼雅の孫、中納言家経の子、侍從教雅が出家して身阿弥陀仏と号していたことは『尊卑分脈』によってわかる。『大日本史料』には「念仏ヲ専修スルニ依リ」という綱文を立てるが、「念仏上人」と称して傾城を集め、「過法」（悔過法か）を修していたのであり、「専修念仏」それ自体が罪業であつたわけではない。別稿で論じたような、建保五年（一二一七）に空阿が党類を結び、多くの檀越を集めて念仏を修し、天下の貴賤が競つて結縁したので、延暦寺衆徒の訴えによつて関外に追却されたことが想起される。空阿の場合は専修念仏者として指弾されたが、教雅の場合は徒党を組み、傾城と淫靡な修法を行なつて罪科に処せられたという点が異なる。

念仏という外皮を纏つた風紀問題であつたが、教雅の余党の念仏者たちは、「慥停廃其行於帝土之中、悉追卻其身於洛陽之外」となつた。しかし、「但或為自行、或為化他、於至心專念如法修行之輩者、不在制限」という付帯条件が付いていた。宣旨には、念仏の行を帝土中において停廃すると大仰に言うが、実のところは洛外への追放に過ぎなかつた。教雅は流罪に決したとの風聞に接して隱居（逐電）した。隆寛も幸西も京都から姿を隠し、東国や讃岐國を経廻していたという。彼らの逐電は、任意的か強制的かの差異はあるが、京都からの追放と同等の法的効果を持つたはずである。

文暦二年（一二三五）七月十四日に、

一、念仏者事

於道心堅固輩者、不及異議、而或喰魚鳥、招寄女人、或結党類、恣好酒宴之由、遍有聞。於件家者、仰保々奉行人、可令破却之、至其身者、可被追却鎌倉中也。

という追加式目が出て、さらに同月二十四日、幕府は朝廷に「称念仏者着黒衣之輩、近年充滿都鄙、横行諸所、動

現不当濫行云々。尤可被停廢候。於関東者、随被仰付、可致沙汰候」と言上している⁽³³⁾。幕府は朝廷の意向を受けて、魚鳥を喰らい酒宴を好む不当濫行の、黒衣を着る念仏者を鎌倉から追却することを命じたが、道心堅固の者は異議に及ばずと例外を設けている。これは先の宣旨の、自行・化他のため、至心に如法修行する念仏者は、念仏を停廢することなく、しかも洛陽の居住が許されたのと趣旨を同じくするのである。一律に「停廢」を令することを憂慮した、為政者の宗教政策として当然の措置と考えられる。

いわゆる「嘉禄の法難」に際して出た諸法令(宣旨・繪旨・御教書等)は、専修念仏興行の停廢を目的にしたもので、より端的に言えば専修念仏者を京都または鎌倉といった政治都市から追放を命じたものであった。すなわち念仏停止令ではなく、念仏者追放令とでも称すべき法令である。別稿と併せた結論を言うなら、「専修念仏停止」を命じた法令は史料上に一度も確認できないということになる。なおこの点で、日蓮が一連の諸法令を集めた著書を『念仏者令追放宣旨御教書集列五篇勘文状』(『念仏者追放宣状事』)と名づけ、日向が『浄土宗見聞』の中に設けた一節を「念仏者所追事」と題したことは、歴史的に正しい認識の表れではなからうか。

註

- (1) 『佛教大学歴史学部論集』第五号(二〇一五年)。以下「別稿」という。
- (2) 平雅行『日本中世の社会と仏教』第三篇Ⅷ「建永の法難について」(一九九二年、塙書房)。
- (3) 「嘉禄の法難」について新見解を提示したのは、平雅行注(2)著書第三篇Ⅸ「嘉禄の法難と安居院聖覚」である。本稿は同論文から多くの示唆を得た。
- (4) 日蓮『念仏者令追放宣旨御教書集列五篇勘文状』(『念

仏者追放宣状事)、日向『金綱集』卷五(「浄土宗見聞」下)、「停止一向専修記」(伊藤真徹『日本浄土教文化史研究』第四篇「浄土教信仰資料」所収)など。

(5) 国書刊行会本は「四月廿七日」とするが、『大日本史料』は「六月二十七日ノ条ナラン」とする。

(6) 坪井剛「法然没後の専修念仏教団と「嘉禄の法難」事件」『史林』九五巻四号(二〇一二年)において、「嘉禄の法難」の、定照・隆寛の応酬から張本三名の流罪まで、一連の流れを整理している。本稿では同論文を参照しつつ

つ、関係史料を交えて検討する。

- (7) 日向『金綱集』巻五(「浄土宗見聞」下)。以下、特に断らない限り、「念仏者所追事」所収の諸史料によって事件の推移を述べる。

- (8) 伊藤真徹氏はこの宣旨および同日天台座主御教書を貞応三年のものと推定するが(注(4)著書、平雅行氏が指摘するように(注(2)論文、嘉禄三年が正しい。この宣旨は「停止一向専修記」や『念仏者追放宣状事』にも収めるが、古文書様式から見て正確に引いているように思える「停止一向専修記」を用いる。なお、「停止一向専修記」に収める(年欠)六月二十九日宣旨、(年欠)七月五日諭旨を、その奉者の官職・位階から嘉禄三年と推定したのは、井川定慶「元祖滅後法難記録発見に関して」(『摩訶衍』弐巻弐号、一九二一年)が最初である。
- (9) 七月五日後堀川天皇諭旨にも「兵衛入道不知実名事、任衆徒奏聞之趣、被仰遣関東、随其状可有左右候、此由同可御下知候。重恐惶謹言」と追言しているのは、なかなか埒が空かなかったからであろう。

- (10) 『法然上人伝』巻一〇、『知恩伝』、『鎌倉遺文』第三六二八号文書。『法然上人伝』『知恩伝』ともに正確に文書を引用していないので、適宜に校訂した。

- (11) 『知恩講私記』(井川定慶『法然上人伝全集』所収)。

- (12) 注(6)坪井剛論文。

- (13) 注(3)平雅行論文。

- (14) 『民経記』嘉禄三年七月三日条裏書、六日条、『明月記』同月三日、六日条。

- (15) 「停止一向専修記」による。

- (16) 『鎌倉遺文』第三六三二号文書。

- (17) 『念仏者追放宣状事』。

- (18) 国史大系は「イ本宮本」に従って「五日」に訂するが、原本の「七日」が時系列的に正しいと思われる。

- (19) 『民経記』嘉禄三年七月廿五日条に「可入十七日之分也」と注記して引く。

- (20) 例えば平雅行氏は「専修停止の宣旨はすでに六月二十九日に発布されており、(中略)七月十七日には五畿七道に専修停廃の宣旨が下され」という(注(3)論文、354頁)。

- (21) 貞応元年七月八日印円議状(『鎌倉遺文』第二九七六号文書)、貞応三年九月日東寺三綱解案(同第三二九一号文書)など。

- (22) 建保七年閏二月八日官宣旨(『鎌倉遺文』第二四五八号文書)

- (23) 『皇代暦』貞応三年八月五日条。

- (24) 注(6)坪井剛論文60〜61頁。

- (25) 『鎌倉遺文』第三六六五号文書。

- (26) 幸西(成覚房)については、(年欠)十月二十日関白家御教書(『鎌倉遺文』第三六七七号文書)によると、讃岐国大手島を経廻しているとの情報であった。

- (27) 『鎌倉遺文』第三六七四号文書。

- (28) 『法然上人行状絵図』巻四第四段。

- (29) 『鎌倉遺文』第三六六九号文書。『鎌倉遺文』は『念仏無間地獄鈔』や『念仏者追放宣状事』に基づき、日付を

「十日」とするが、『浄土宗見聞』下所収「念仏者所追事」に従い、「二十日」に訂する。

- (30) 小此木輝之「嘉祿の法難と関東浄土教の展開」阿川文正教授古稀記念論集『法然浄土教の思想と伝歴』（二〇〇一年、山喜房佛書林）。法然廟の破壊も含むいわゆる専修念仏弾圧の原因論に言うところ、成田俊治「法然とその教団に対する弾圧運動について」（『仏教論叢』九号、一九六二年）が注目される。成田氏の所説で、山門内部の上層部の梶井門跡と青蓮院門跡の対立が念仏弾圧の一因であるという見解は支持できるが、九条家と近衛

家の政權交代も弾圧運動に関わるという見方には直ちに賛意を表しえない。

- (31) 平雅行氏は注(3)論文において、「十月十五日の聖覚らの要求に、この問題（選択集印板焼却―引用者注）も含まれていた可能性が極めて高い」として、「わずか六年前に『唯信抄』を著わした聖覚が、『選択集』の印板焼却にまで関わっていたこと」に驚きの念を隠さず、聖覚像の再検討を行なっている

- (32) 『鎌倉遺文』第四六七号文書

- (33) 『中世法制史料集』第一巻。